

所属・資格 ドイツ文学科・教授

申請者氏名 大羅 志保子

研究課題		インゲボルク・バッハマン並びにドイツ語圏現代文学研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	申請者はこれまで、オーストリア出身の女性作家インゲボルク・バッハマンを中心とした第二次世界大戦後のドイツ語圏文学、とりわけ、ナチス以後の文学のあり方を、社会運動や政治参加（engagement）の言説に重点を置いて検証・評価するドイツの戦後文学傾向とは異なり、文学作品を専ら言語芸術として捉え、その構造や言語そのものの仕組みなど、文学内在的な要素の変革・革新に傾注するオーストリアの戦後文学を中心に研究してきた。本研究では、この研究方向を維持しながら、文化・経済のグローバル化や過去のドイツ語圏へのユダヤ人同化とは異質ながら、現象としては類似するドイツ語圏への移民・難民によるドイツ語圏現代文学の内容や形式、思想への影響を、個々の作品を通して検証する意向である。
	研究の結果	幼年・青年期にナチスの脅威に曝され、父親や親族、地域住民、そして学校の教員までが悉くナチズムの信奉者、加担者であることを驚愕の念で認識したバッハマンには、被害者/加害者という二項対立的な構図を超えた（ナチスの脅威を生み出す）暴力の系譜学的な追究とその的確な表現形式、つまり対立項目を貫く共通原理や、それに纏わる「あれもこれも」一挙に表現できる文学形式の追求が生涯の課題となる。「全ての領域における越境行為が『暴力』を生み出す」という、暴力についての彼女の洞察が作品化された『マンハッタンの善神』（1958年）を更なる研究対象としたが、社会の慣習や道德の枠にとらわれず「究極の愛」を追求する女性主人公を、神（＝宗教）が爆弾テロで抹殺し、法を守る筈の裁判官（＝司法）が、言わばテロリストの神を無罪とし、この（悪しき）神が作品中「善神」と呼ばれる本作品の仕掛けは、まさに善悪の彼岸的な、錯綜した、二律背反的な上記バッハマン的状况を可視化することに成功していることが確認された。
	研究の考察・反省	ラジオ・ドラマ『マンハッタンの善神』が戦争失明者賞を受賞した1959年の受賞講演でバッハマンは、この作品が、もうこれ以上は無理というところまで徹底的に突き進むことにより明らかになる「臨界状況」を描いていることを証し、何事においても私たちは、往往にして究極を極めたいと思い、私たちに課された境界を超えたいという願望が目覚める、しかし、私たちは秩序の裡に留まらなければならず、社会からの離脱はないこともよく知っている、と述懐している。バッハマンの言う越境願望を秩序破壊の革命願望と捉える解釈もあるが、既述したバッハマンの暴力に対する姿勢から、越境願望を既存の秩序に対する批判と見る方が適切であり、善い目的を持つての示威運動も社会の安寧秩序を破壊する臨界状況に達する場合には、殺戮の暴力行為と等価になる危険性を孕んでいると言う、バッハマンの暴力に対する原理的な見方と解釈できる。今後はこの点を、国家論やナショナリズム、グローバリズムの理論書も参考にして研究したいと考える。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 研究発表・研究成果物（論文）ともに次年度以降に予定している。
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	